

大官大寺跡の調査

昭和49年7月～昭和50年1月

この調査は飛鳥京、藤原京研究の一環として、大官大寺の伽藍配置、大官大寺と藤原京の条坊制、および飛鳥京との関連について検討のためおこなったものである。

調査地は香久山の南約800m、明日香村小山字講堂74～80番地で、「講堂」の字名をもつ土壇とその周囲の西北方へわずかに下がる水田である。

調査の結果、講堂・回廊などの遺構を検出した。

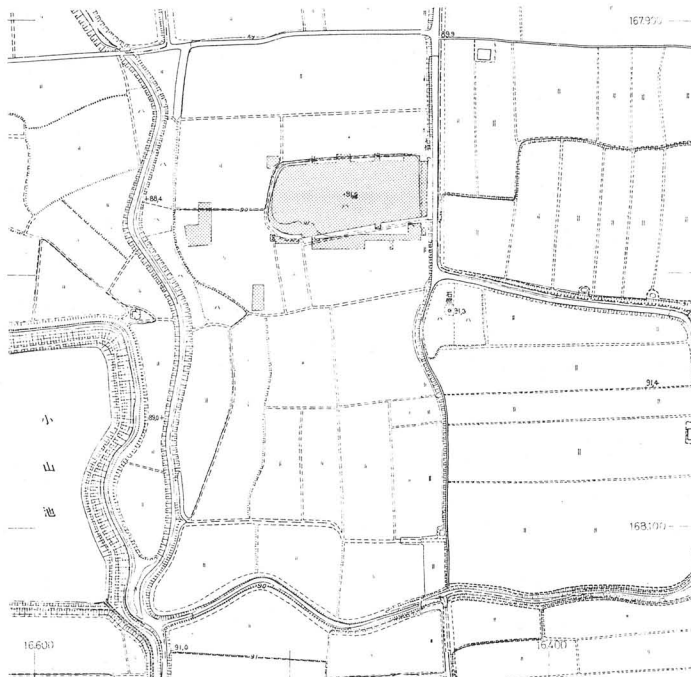
1. 講堂跡

推定講堂跡の土壇は、発掘前は周囲の水田からの比高約2m、東西65m、南北30mの矩形に近い畑であった。この土壇上には明治年間までは礎石が残っていたが、明治22年橿原神宮造営の際に抜取られ持ち運ばれたと言われている。

〔基壇〕 調査で確認した講堂の基壇は、東・西・北端はほぼ土壇内におさまっていたが東南部は土壇外の水田下で検出した。基壇規模は、化粧石部分を除くと、東西約53m・南北約28.5m・現在高約1.7mである。方位は、国土調査法による第6座標系の方眼北に対し、西へ約0°14'振れている。上面は耕作によって著しく削平されており、礎石の据付け掘方・根石は遺存しておらず、わずかに、東梁行側柱列の中央間二間分三ヶ所の礎石抜取穴を検出したのみである。この礎石抜取穴は、出土遺物より、橿原神宮造営のために礎石を運んだ際のものとみられる。抜取穴は径1.4～2m・深さ0.5m～0.9m程の不整形な穴で、心々距離は約4.8m・5.8mである。抜取穴には楔によって割られた花崗岩礎石の破片が残っている。その一つには、円柱座の造り出しがあり、それによれば、直径約116cm、高さ約10cmの円柱座を有する径150cm、高さ60cm以上の不整形円形の礎石が復原できる。基壇は、西北方へ緩やかに下がる旧傾斜地上に、黄褐色土の山土と、弥生式土器などの遺物を含む青灰色粘土とを互層に突き固

めた版築技法によって築成されているが、旧表土を掘り下げる掘込地業は認められなかった。基壇の周囲は、基壇の黄褐色土と似た土などを積んで整地し、東西南北をほぼ同レベルにしている。

基壇の化粧石は全て抜き取られている。この化粧石の抜取作業は、基壇周囲に廃棄した焼土や瓦の堆積層の上面から基壇に沿って幅約1mの溝を掘り、凝灰岩切石の化粧石を起こしてはずし取ったものである。その時期は抜取溝埋土よりの出土土器からみて、8世紀前半である。抜取溝の基壇側の側壁は、化粧石据付けの裏込め土の残っている箇所では、底面より30cm程の高さのところではわずかに段をなしている。この段の上面や側壁や、また溝の底面には、部分的に凝灰岩の粉や碎片が付着、散乱しており、凝灰岩切石が据えられた状態を示していた。また溝の底面には、板石を起こす際に、石の端に接して掘り窪めた跡とみられる小穴や溝状の窪みが約1mの間隔で並んで残っているところも認められた。これらの化粧石の据付抜取状況などから基壇化粧を復原すると、一番下に奥行約0.8m・幅約1m・高さ約0.3mの延石を据え付け、この上に地覆石を置き、さらにその上に羽目石を立てる構造のものが考えられる。ただ、



大官大寺周辺地形図(3000分の1)

基壇上部については、削平によって全く痕跡をとどめていないので明らかでない。

また、基壇化粧の調査の際、基壇下の東北・東南・南西隅の化粧石抜取溝底面で、花崗岩の礎石状の石を検出した。東北隅ではこの石の抜取痕跡が認められた。この石は、長さ約1~1.5m・幅約1m・

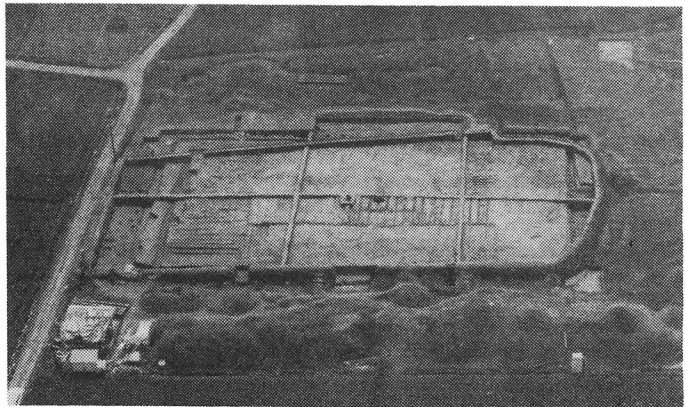
厚さ約 0.5 m である。上面は水平に整形し、外側の二面は上部を面取りして直角にし、それぞれ基壇と平行にしてある。上面のレベルは延石の下面と同じで、寺の旧地表面よりは数 cm 低い。この石の据付掘方は認められないので、講堂周囲の整地と同時に据え置かれたものと思われる。石の下には、石を加工した際の碎片とみられる花崗岩の細片が一・二片認められたが、根石は無い。この石の機能については、軒の四隅を支える支柱の礎石、基壇化粧の四隅を補強するもの、造営開始時に基壇の四隅を確定するために据付けた榜示石的なもの、等々の考え方がありうるが、類例が無く、性格についてはなお検討中である。

階段については、化粧石抜取溝が基壇周囲を長方形にめぐっており、外側への部分的な張り出しなどは全く認められず、また、積土や地覆石などの痕跡もなかった。

以上の調査結果から、建物の平面形は、岡本桃里、本沢清三郎の記録と同じく桁行 9 間、梁間 4 間とみられるが、柱間は両氏の記録よりも大きいようで、桁行 17 尺等間、梁間 17・18・18・17 尺、側柱から基壇までは、南北・東西ともに 13 尺と復原できる。

〔基壇の周辺〕 基壇の周辺には、多量の瓦や焼土が集められ廃棄されていた。この瓦や焼土の堆積層を取り除くと、ほぼ原状をとどめているとみられる、もとの整理された地表面が検出されたが、雨落溝の痕跡は確認されなかった。

南面と東面の化粧石抜取溝の外側では、講堂造営時の足場とみられる柱の掘方列を検出した。いずれも、整地層の上面より掘り込まれている。柱間は 2 ～ 2.5 m であるが、7 m ～ 9 m のところもあり、一定していない。いずれの柱穴にも柱抜取痕跡が認められた。基壇の南・東面と北面東端の化粧石抜取溝の外側では、桝木や隅木が火



大官大寺調査全景（北から）



柱木落下痕跡(西から)

災によって焼け落ち、地面に斜めに突き刺さった痕跡を検出した。いずれも一辺約15cmの方形の横断面をもつ穴で、柱木本体は遺存していなかったが、穴の壁には炭が付着していた。特に南面中央部では、柱木落下痕跡が一行に並んだ状態で遺存していた。その中には、穴の上面近くに柱木を打ちつけたとみられる角釘の残っているものも存在した。これらの痕跡から、柱木は方約15cmの角材で、約40cmの間隔で並べられていたことがうかがえる。

基壇東北端の外側では隅木の落下痕跡を1ヶ所検出した。これには隅木本体の一部も遺存していた。腐蝕が甚だしいが短辺・長辺ともに30cm以上と測りうる。この先端近くには風鐸を吊り下げた金具類が残っていたが、小口面に飾り金具は認められなかった。

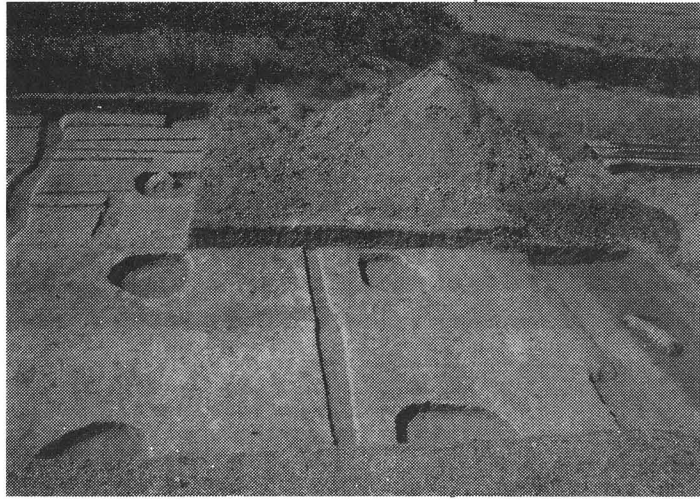
2. 回廊跡

講堂の両脇に東西に延びる回廊が取り付くことを確認したので、講堂心の西方約50mのところにもトレンチを入れて調査した。

基壇は、化粧石部分を除くと南北10.3m、現存高は講堂の取付部で約60cm、西方トレンチでは約10~20cmで、講堂基壇より西へ37m以上延びている。したがって、東・西面回廊間の距離は127m以上になる。基壇の方位は、講堂基壇に比べて、東で北に10'以上大きく振れている。基壇は削平が著しく遺存状態は良くなかったが、一部で礎石の抜取穴や据付掘方列を検出し得た。抜取穴は径1.5m前後の不整円形で、穴の心々距離は南北4.5m、東西4m前後である。礎石据付掘方は抜取穴によって大部分破壊されているが、西方トレンチ東端に南北に二つを検出した。穴の形状は不明だが方2m程の穴で、心々距離は約4.4mである。

基壇は整地土上に暗灰色の粘土および砂質土を数層積み固めて築成されており、講堂基壇にみられた版築とは異なるものである。積土中には少量の瓦片を

含むところもある。基壇化粧石はほとんどが抜取られていたが、一部に30~50cm大の川原石が残っており、基壇化粧の基底部は玉石積であった可能性が大きい。しかし、基壇外では凝灰岩片を少量検出しており、上部につい



回廊跡（東から）

ては凝灰岩で化粧していたことも考えられる。以上の調査結果から、回廊建物は、桁行約4m（13尺）・梁間約4.5m（15尺）の単廊と復原でき、東西それぞれ10間以上延びるものとみられる。また、北側柱列は講堂の南入側柱列と柱筋をそろえて造営されたものとみられる。

雨落溝については、講堂同様痕跡は認められなかった。

講堂基壇と回廊基壇の取り付け部にも講堂基壇化粧石の抜取り溝が掘られていることから、回廊基壇は、講堂基壇の化粧石を全面にめぐらした後に造営されたものと考えられる。基壇の築成方法、基壇の方位の差異などを考慮すると、回廊は講堂より遅れて造られたものと言えよう。

3. 金堂跡

講堂の南西隣には金堂の存在が予想されるので、講堂心の西方約35m、南北約40mの地点の水田に、5m×9mの南北トレンチを設けて調査した。

遺構面の削平の度合は、回廊のトレンチとあまり差はないが、中世のものとみられる細い溝数条などを検出したのみである。金堂の基壇の積土はもちろん、掘込地業も検出されず、基壇の痕跡は確認できなかった。

4. 下層遺構

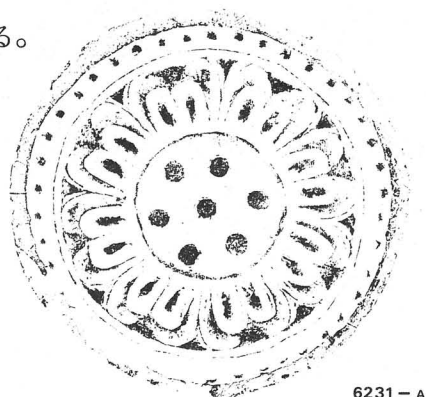
講堂基壇・回廊基壇の下層の一部の状況を調査した。講堂下層・回廊下層には、藤原宮期の遺物を含む包含層が認められた。回廊下層では、この包含層の

下層上面から掘り込んだ柱穴を2個検出した。これはトレンチ東壁の断面調査で検出したもので、穴の形状は明らかでないが、いずれも一辺70~90cmの方形を呈すると思われるもので、南北に約3.5mの間隔で並ぶ。南側の柱穴には柱痕跡も認められた。この柱穴は東西棟建物の一部である可能性があるが、東西については未調査であり明らかでない。

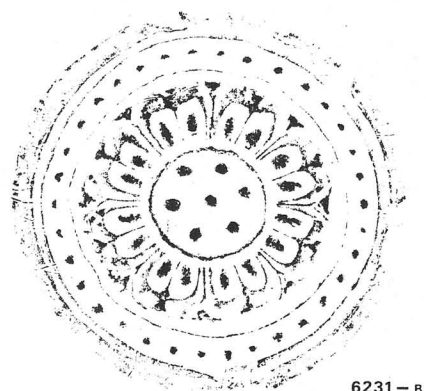
5. 出土遺物

遺物には、瓦・土器・金属製品などがある。

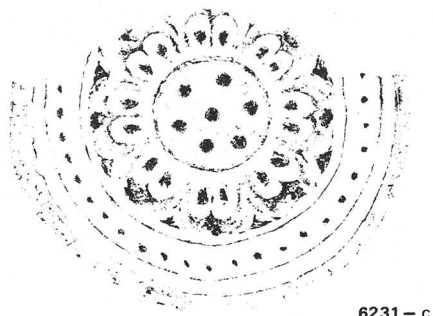
＜瓦＞ 瓦は講堂周辺をはじめ、全調査地域から多量に出土した。大部分は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦・軒平瓦も多数あり、道具瓦では熨斗瓦が多く、他に面戸瓦・雁振瓦が若干みられる。軒丸瓦6231はいわゆる大官大寺式のもので、文様細部の差異により、A・B・Cの3種に分けられる。Aは、B・Cに比して内区径が大きく、文様が大ぶりである。B・Cの差異は僅少で、蓮子のわずかな配置の相違で区分できる。B・Cともに周縁が広く、そのために瓦当全体の面径はAと比して大差ない。A93点・B14点・C15点が出土している。軒平瓦6661は、文様の細部の差異によりA・Bの二種に分けられる。Aは瓦当厚がBに比して厚く、文様は全体にAの方が大ぶりである。顎は、いずれも段顎であるが、Aの方が高い。A244点、B29点が出土した。軒丸瓦・軒平瓦は、焼成技法からみて、それぞれ2群に分れる。軒平瓦6661Aは胎



6231-A



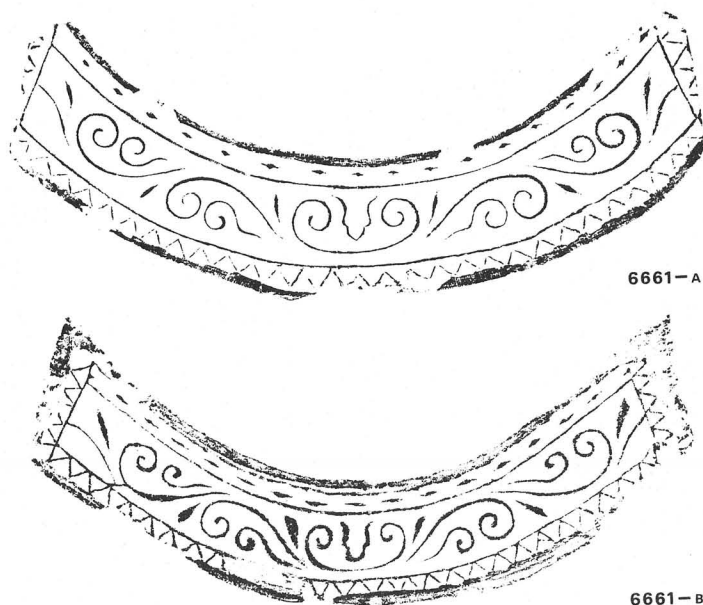
6231-B



6231-C

大官大寺出土軒丸瓦（4分の1）

土が精緻であるが焼成は軟質であり、それに対し、6661Bは胎土に長石類の砂粒を多量に混じ、堅緻に焼成している。製作技法をみると、平瓦部が、Aは粘土板桶巻づくりであるのに対し、Bは粘土紐桶巻づくりによっている。軒丸瓦も軒平

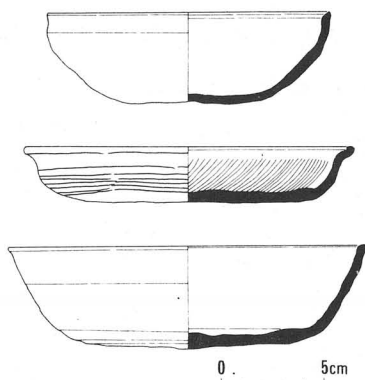


大官大寺出土軒平瓦（4分の1）

瓦に対応して、6231Aと6231B・Cの2群に分れる。製作技法では、Aの丸瓦部は瓦当面径に合わせて大きいのに対し、B・Cでは丸瓦が小さいため、とりつけ位置が低く、上端は強い曲線になっている。軒丸瓦に関しては、軒平瓦と違い、各型式ごとの胎土・焼成については肉眼で観察して明瞭な相違を認めることはできない。したがって、軒平瓦における2群がそのまま軒丸瓦と対応するかどうかは十分な検討が必要である。熨斗瓦は、ふつうの平瓦を焼成前に半截して周囲を整形したもので、凹面に布目を残すものと、平坦で布目のみられないものとがある。後者は埴かもしれない。丸・平瓦は出土量が多量で、現在整理中であるが、一部の観察によれば、丸瓦はすべて玉縁を有するものばかりであり、平瓦は格子叩きの破片が少量ある以外は、すべて縦位の縄目の叩きによるものである。

<土器> 土器は主に講堂基壇化粧石の抜取溝と基壇築成土及び下層の包含層とから出土した。抜取溝からは、完形の土師器の皿A・碗Cの他、須恵器坏A・坏Bが出土した。これらは八世紀前半に位置づけられるものである。基壇築成土及び下層の包含層からは、小片ではあるが、須恵器横瓶・甕・礫・坏A・坏B・円面硯、土師器坏A・甕等が出土した。これらは藤原宮出土土器と同型

式に属するものである。その中に、須恵器坏Bの底部に「吞」と判読できる墨書土器が1点あるのが注目される。また、下層からは中津式・天理式に属する縄文後期初頭の土器が出土した。破片となっていたが、2個体のほぼ完形品となる。遺存状況からは二次堆積の可能性は少なく、付近に縄文後期の遺跡を考慮する必要があるだろう。



＜金属製品＞ 鉄釘28点、飾り金具2点、銅玉2点、基壇化粧石の抜取り溝出土の土器点、風鐸の吊り金具類などがある。飾り金具は、唐草文の透し彫りのある金銅製品で、縦42cm・横33cm・厚さ0.2cmと復原できる。18ヶ所に鉋穴があり、その一部には青銅製の鉋が遺存していた。これは、隅木か尾極木の木口面の飾り金具とみられるが、他に例を見ない大形のものである。風鐸の吊り金具類は落下した隅木本体に取付いて出土したものである。環釘・八葉の座金具・青銅製遊環がある。

この他に、基壇化粧石の凝灰岩片や焼けた壁土も出土している。壁土にはスサを混じ、表面には漆喰が厚さ0.5cm程に塗布されている。

6. むすび

今回の調査結果から大官大寺の伽藍配置を考えると、正面に講堂を置き、この前面の東に塔、西に金堂を配し、これを講堂から延びる回廊が囲む観世音寺形式か法起寺形式、講堂の前に塔と戒壇院を配し、この前に金堂を配する下野薬師寺形式が推定できる。ただ、これまで講堂としてきた建物跡を講堂と断定できる資料はないので、それを金堂とみて、この前面に塔と西金堂を向いあわせた川原寺形式も一応は考えられる。しかし、以下に述べる点からみてやはり講堂とみる方がよいであろう。すなわち、53m×28.5mという基壇の規模に匹敵する建物は、金堂の例としては、東大寺・大安寺・興福寺・西大寺など奈良時代の寺院以外にはなく、この規模のものは講堂に近いものが多い。また9間×4間という平面形式の点でも、金堂は5間×4間が一般的であり、9間×4間の平面形式の例はない。さらに、講堂は4間×7～9間が通有であることや、

橋本伊知朗（注1）が指摘しているように、桁行と梁間の比率の点で、奈良以前のものは、講堂の方が大きい傾向があることなどの諸点があげられる。

講堂の基壇については、前述したような壇正積あるいは切石積の化粧構造が考えられる。しかし、延石とした板石が奈良時代の寺院に通有の延石に比べて奥行が大きく、平面正方形に近い板石状を呈していることや、延石の外側に雨落溝あるいは雨落痕跡がなく、雨落が延石上になる可能性が考えられる点など、一般的な壇正積基壇とは異なった構造も考慮する必要がある。基壇四隅外側の花崗岩の性格とも関連して、今後、検討すべき課題である。

階段については、検出されなかったが、仮に、端が化粧石抜取溝の外側に延びないものであったとすれば、出が0.8m以内であり、講堂基壇高が2m以上に復原されることから、階段の傾斜を考慮すると、講堂の基壇を一部切りこんで階段を取り付ける形式も考えなければならないであろう。このような例は、多賀城正殿の第Ⅲ・Ⅳ期とされている遺構にみられるが、この例は時期が下がるものであり、大官大寺の時期まで遡りうるかも問題となる。いずれにしても、階段の構造や有無の問題についても、今後検討する必要がある。

大官大寺の創建時期については、天武二年説－日本書記・大安寺伽藍縁起并流記資財帳－と、天武十二年説－元亨釈書・扶桑略記・菅家本諸寺縁起集－などがある。今回の調査では講堂と回廊の一部を検出したのみであり、伽藍全体の上限については今後の調査にまたねばならないが、講堂・回廊下層の土器からみると、藤原宮造営とはほぼ並行する時期に造営されたと考えるのが妥当ではなかろうか。このことは、天武年間の大官大寺の造寺の記事や大官大寺における出家・誦経・無遮大会の記録を考慮して、講堂・回廊の造営が他の主要伽藍の造営よりも遅れたことを示すものと解することもできる。しかし、大宝元年に「造大安・薬師二寺官准寮」とあり、縁起などは文武朝に九重塔・金堂が造営されたことを記しており、これら主要伽藍が文武年間に至るまで未完成であったことを伝えている。したがって、講堂・回廊だけが遅れたとすることはできず、むしろ、大官大寺伽藍の造営の上限を、持統年間を大幅に遡らない時期に求めるべきであろう。とすれば、文献上の記録もこの点から再検討する必要

があらう。

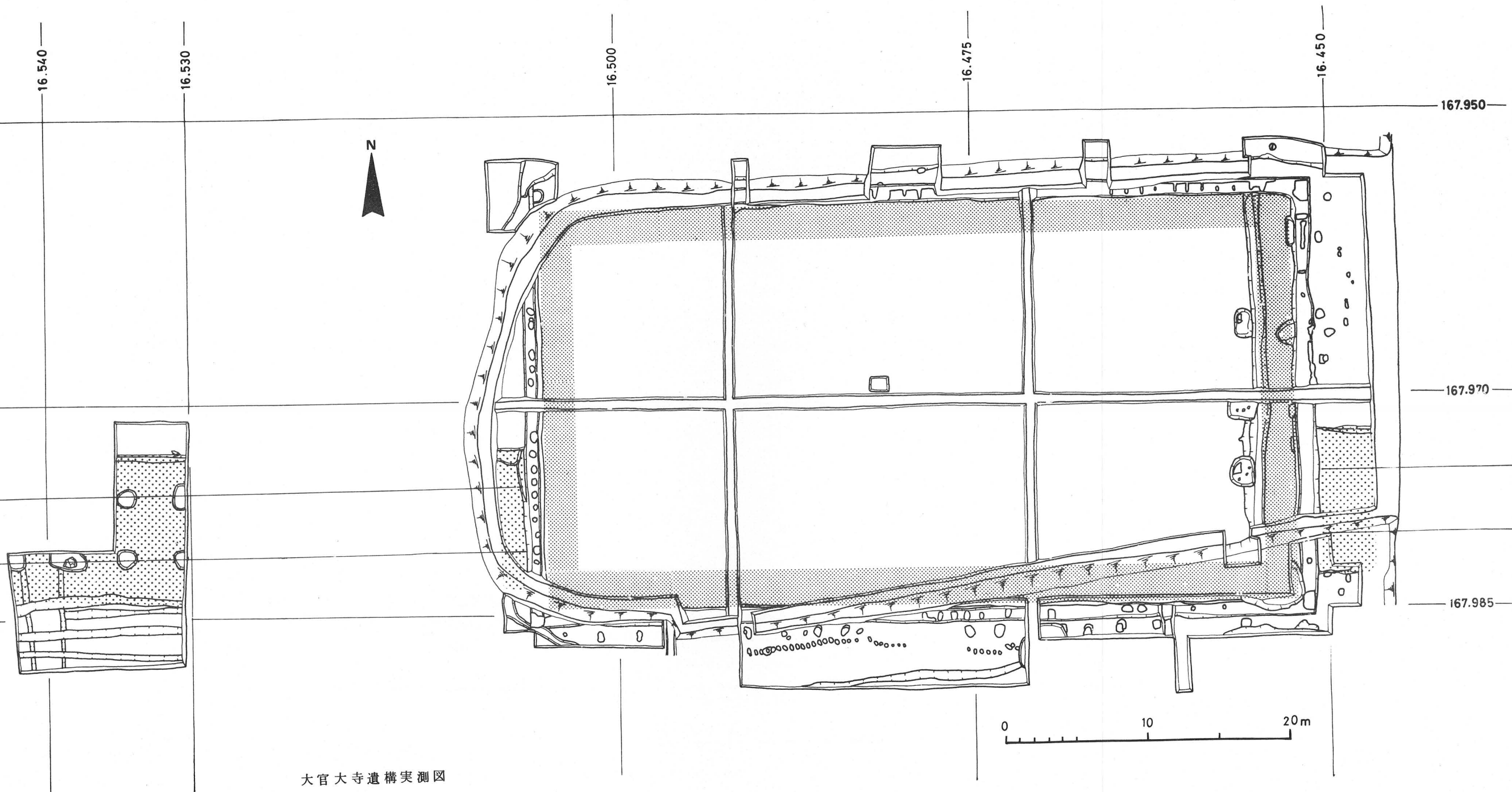
大官大寺の創建時期についての上記の調査結果や薬師寺と並ぶ官寺である性格を考慮すると、大官大寺は藤原京条坊計画に則って造営されたことが十分予想される。これまで、藤原京は南北十二条・東西八坊の条坊が復原され、区画線の線引きが行なわれている。しかし、今回知りえた大官大寺講堂の中心線は、これまで岸氏によって復原されている十条四坊の東西中心線と正確には一致しない。講堂造営時における測量誤差も考慮しなければならないが、同時に条坊復原における細部の線引きの再検討の必要があることをこの事実は示している。

これまで発掘調査などによって、藤原京内で確かな位置の判明している資料、すなわち、本薬師寺中軸線、藤原宮の宮域で検出した道路遺構とみるべき交差点などから条坊を復原すると、真北に対して20分以上西偏した方格線となる。藤原京条坊が真北に対して西偏するものとすれば、このことは、単に藤原京条坊推定線の修正のみならず、飛鳥京の方格地割研究にも再検討を迫ることになる。すなわち、飛鳥京方格地割の基準線は藤原京東京極たる中ツ道の南延長線とされているが、西偏した藤原京条坊を考慮すると、中ツ道の位置も飛鳥地域ではこれまでの推定線よりやや東へずれることになる。飛鳥京の方格地割は、藤原京条坊との関連性の問題も含めて、今後細部についての厳密な検討が必要とされる。

大官大寺が平城京に移った年代については、和銅三年説と天平元年説とがある。今回の調査で講堂の焼失が確認されたが、これは『扶桑略記』和銅四年焼亡の記事に相当するものと考えられ、焼失後、講堂・回廊の再建は認められないので、藤原宮の平城遷都と同時（和銅三年）に平城京へ移転するという形をとった可能性が大きい。

大官大寺跡を含む付近一帯は飛鳥岡本宮の推定地とされている。今回は、大官大寺下層については一部を調査したにとどまった。回廊の下層で藤原宮期以前の柱穴を検出した。ただし、岡本宮に関連するものかどうかは明らかでなく、今後の調査が望まれる。

注1 橋本伊知朗 『大官大寺考証』 昭和44年。



大官大寺遺構実測図